

---

 学 会 記 事
 

---

## 第46回新潟消化器病研究会

日 時 昭和62年7月18日(土)  
午後1時30分より  
会 場 新潟厚生年金会館

## 一 般 演 題

- 1) 食道裂孔ヘルニア合併食道潰瘍に対する aluminum hydroxide gel, magnesium hydroxide (Maalox®) の少量・頻回・長期投与例の検討

小林 英司・本間正一郎 (新潟県立六日町病院外科)

食道裂孔ヘルニアは、胃の一部がヘルニア内容となり食道裂孔を通り胸腔内へ脱出するため下部食道括約部機能不全を生じ、胃液逆流による食道炎・食道潰瘍を併発しやすい。諸施設で外科的治療法の検討が加えられているが、高齢者に好発するため保存的治療も望まれることも多い。食道裂孔ヘルニア特に滑脱型ヘルニアに食道潰瘍を合併した11症例に aluminum hydroxide gel, magnesium hydroxide (Maalox®) を長期投与した。同剤の潰瘍部付着作用に注目し、少量(一口)頻回投与を行い、投与のための携帯用薬びんに工夫を加えた。全例に自覚症状の改善を認めたが、内視鏡改善率は45%であった。内視鏡改善の認められない症例につき、 $H_2$  受容体拮抗剤または抗コリン剤を投与したが有意の差は認められなかった。同剤の長期投与による血液生化学的異常及び便秘や下痢等の消化器症状の副作用は認められなかった。

- 2) 内視鏡下点墨法による胃潰瘍の治癒機転に関する検討

秋山 修宏・成澤林太郎  
植木 淳一・阿部 実 (新潟大学)  
富樫 満・上村 朝輝 (第三内科)  
市田 文弘  
山口 正康 (同 第一病理)

$A_1 \sim H_1$  stage の胃潰瘍症例9例に対し、潰瘍治療前に潰瘍辺縁の胃粘膜に4ヶ所点墨を施し、それぞれ対側の点墨間距離と潰瘍の大きさを内視鏡下にメジャーを用いて測定した。同時に超音波内視鏡(以下 EUS)により再発所見の有無を確認した。同様に治療後の  $S_1$

stage の状態における点墨間距離を測定し、治療前後で両者を比較検討した。点墨間距離が治療前後でほとんど変化の見られないものは6例であり、6例中4例が EUS にて再発潰瘍と診断できた。点墨間距離の短縮が見られたものは3例であり、3例中2例が EUS にて再発潰瘍と診断できた。胃潰瘍の治癒には胃壁の収縮がほとんど関与せず、上皮の再生が主たる治癒機転であるものが存在する事が示唆された。

- 3) 腰痛を主訴とした胃癌の1例

中沢 俊郎・樋口 渉 (信楽園病院内科)  
塚田 芳久・村山 久夫

症例は37才男性、昭和62年2月腰痛を主訴とし整形外科を受診するも異常を指摘されず、5月になり他院にて血清 ALP の上昇を認め精査目的にて当院入院となった。入院時、血清 ALP の著明な上昇と骨シンチにて骨盤、胸腰椎にびまん性の著しい集積を認め、転移性骨腫瘍の存在を疑った。消化器症状を認めなかったが、原発巣検索の目的で施行した胃カメラにて体部小彎に IIc 類似進行癌の所見を認め、骨転移を伴う進行胃癌と診断した。初期 UFT、レンチナンを投与するも、1ヶ月後、血清 ALP の急上昇を認め ADR、MMC を追加投与したが、びまん性肺転移によると思われる呼吸不全にて死亡している。剖検でも、胃体部 IIc 類似進行癌で膈への直接浸潤を認めた。胃癌の骨転後は比較的少なく、消化器症状を欠如したため診断の遅れた1例であった。

- 4) 胃病変を有するサルコイドーシスに胃悪性リンパ腫を合併した1例

岡田 和彦・味方 正俊 (立川総合病院)  
渡辺 裕・大貫 啓三 (内科)  
大溪 秀夫・酒井 靖夫 (同 外科)  
北島久視子  
富樫 満 (新潟大学)  
福田 剛明 (第三内科)  
渡辺 英伸 (同 第二病理)  
(同 第一病理)

症例は23才男性、昭和59年11月胸部X線で両側肺野のびまん性粒状陰影および BHL を指摘され来院。リンパ節および胃粘膜生検でサルコイド結節が証明された。プレドニン療法を試みたが昭和61年3月以降は来院せず。昭和62年1月意識消失発作あり来院。頭部 CT、MRI では神経系の器質的疾患は否定された。この際に胃内視鏡施行し、前庭部に多発性潰瘍性病変がみられ、生検で悪性リンパ腫と診断された。

以上胃病変を有するサルコイドーシスに胃悪性リンパ

腫を合併したきわめて稀な興味ある症例を経験したので報告する。

#### 5) 腸閉塞症状で発症したクローン病と思われる 1 例

田代 成元・山本 賢 (田代消化器科病院)  
朴 鐘干・斉藤 建吉

症例は34才の女性で、昭和61年10月5日より腹痛と共に頻回の嘔吐で発症し10月6日入院。37.4°Cの発熱、ツ反(-)、白血球5900、ZTT 19.3、 $\alpha_2$ gl 10.8、 $\gamma$ -gl 26.4%、抗核抗体(+)、LEテスト(-)、抗DNA抗体(+)、腹水軽度(+)、尿アミラーゼ20700と増加、胃腸X線像で、十二指腸空腸移行部より10cm肛側に8cmに亘る狭窄とcobble stone様病変、なお、肛側にskipする病変を認め、クローン病を疑い、副腎皮質ホルモン、IVH挿入などの治療にて、狭窄病変は、比較的早期に消失した。10月16日、小腸内視鏡検査を行ったが、狭窄部は治癒し、潰瘍や隆起を認めず、生検でもmicrogranulomaも認めることが出来なかった。副腎皮質ホルモンに良く反応した点、X線像上でcobble stone様粘膜面のみられたこと、skip lesionがみられたことなどから、クローン病を強く疑った。

#### 6) 多発性腺腫を伴った潰瘍性大腸炎の 1 例

杉田 健一・味方 正俊 (立川総合病院)  
渡辺 裕・大貫 啓三 (内科)  
田崎 義則 (田崎医院)  
山口 正康・渡辺 英伸 (新潟大学第一病理)

症例は69才、女性。以前より軟便傾向であったが、自然に軽快していた。1987年1月頃より臍周囲痛および下痢が出現。その後、血性下痢となり同年3月当院入院。大腸X線および内視鏡検査では全結腸のハウストラ消失、鉛管状変化、棘形成および大小さまざまなポリープ様隆起の多発を認め、ポリープの生検では腺腫であった。以上から、高齢発症の潰瘍性大腸炎の活動期で多発する腺腫を合併したものと診断。サラゾピリン内服、ステロイド注腸等で症状は軽快したが、多発腺腫のうち、横行結腸のものは3×2cmと大きく、肉眼的形態も含め癌を否定できず、7月再度生検を施行したところ肉芽組織しか採取できなかった。今後十分な経過観察を要する症例と考える。

#### 7) 免疫学的便潜血反応を用いた大腸疾患スクリーニングの試み

植木 淳一・永田 邦夫 (新潟大学第三内科)  
富樫 満・成澤林太郎 (新潟大学第三内科)  
上村 朝輝・市田 文弘  
下田 聡・井上雄一郎 (同 第一外科)  
尾崎 信紘 (新潟通信病院健康管理科)  
須田 陽子 (同 内科)

大腸疾患のスクリーニングを目的として、免疫学的便潜血反応(OCヘモデリア)の使用を試みた。CF施行者87例の検査前日の便潜血は陽性18例20.6%、陰性69例79.4%であった。陽性者中15例83.3%に病変を認め、悪性腫瘍4例(腺腫内癌2例)、腺腫4例(径10mm以上3例)、活動期潰瘍性大腸炎4例が含まれた。陰性者には、悪性腫瘍2例(3mm径のIIc、腺腫内癌)、腺腫16例(径10mm未満15例)等が含まれた。次に40才以上の郵政職員372例に潜血3日間法を施行、49例13.2%が陽性であった。うち40例にCFを行い、24例に病変を認め、腺腫12例が含まれた。

#### 8) 10年間の難治痔瘻を合併した肛門癌の 1 例

吉岡 一典・小山 真 (県立吉田病院外科)  
阿部 僚一・□ 康弘  
本間 慶一・福田 剛明 (新潟大学第二病理)

症例は60才男、10年前直腸周囲膿瘍の診断で切開術を受けたが本年2月再度肛門痛、排膿を訴え、再切開を行った。その際多量のゼリー様物質の排出を認め、悪性変化が疑われた。5月の生検にてようやく確診が得られ、腹会陰式直腸切断術施行。切除標本の肉眼所見は瘻孔が肛門腺窩に開口し、その周囲粘膜6.5×3.5cmにびまん浸潤型の粘液の付着した病変を認めた。病理組織学的には粘液癌であった。粘液染色では赤紫色を呈し、肛門腺由来も否定できなかった。(a<sub>2</sub>P<sub>0</sub>H<sub>0</sub>n<sub>0</sub>, Stage II).

痔瘻、直腸周囲膿瘍は日常の診療でしばしば遭遇する疾患であるが、長期にわたる難治痔瘻を有し、粘液様分泌や肛門出血を伴う場合には癌の合併を疑い、積極的に局所切除による生検を行い、早期に診断し、根治切除に努めるべきである。

#### 9) 肝に病変をみたサルコイドーシスの 1 例

樋口 正一 (長岡赤十字病院放射線科)  
中村 忠夫 (小千谷総合病院内科)  
登木口 進 (同 神経内科)  
渡辺 俊明 (新潟大学第三内科)